

目次

文学と小民族

7

解説 ジヤック・ルブニク

文学と小民族 チェコスロヴァキア作家大会での演説（一九六七年）

誘拐された西欧、あるいは中欧の悲劇

37

解説 ピエール・ノラ

誘拐された西欧、あるいは中欧の悲劇（一九八三年）

訳者あとがき

97

「鉄のカーテン」／抒情の時代／一九六七年の作家大会／

クンデラの報告の意義／「プラハの春」／

フランスへの移住、そして「東欧」の発見／

「誘拐された西欧、あるいは中欧の悲劇」の射程／

「われわれがあまり知らない遠く離れた国」あるいは小民族／小説家の晩年

訳注

137

誘拐された西欧、あるいは中欧の悲劇（一九八三年）

一九五六年十一月、迫撃砲によって職場が破壊される数分前、ハンガリーの通信社の編集長は、ロシア人がその日の朝ブダペスト攻撃を開始したことを告げる絶望的なメッセージをテレックスで全世界に送っている。電信文はこう結ばれていた。「私たちはハンガリーのために、そしてヨーロッパのために死ぬのです」。

この一文が意味するものは何であろうか？ もちろん、ロシアの戦車によって、ハンガリーが脅威に晒され、同時にヨーロッパも脅威に晒されていると伝えようとしていた。だが、ヨーロッパが脅威に晒されているとは、どのような意味においてだろうか？ ロシアの戦車はハンガリー国境を越えて、西側に向かおうとしているのか？ いや、そうではない。ハンガリーの通信社の編集長は、ハンガリーへの攻撃はヨーロッパを狙ったものであると述べたかったのである。かれは、ハンガリーがハンガリー

であり続けるために、そしてヨーロッパであり続けるために命を捧げるささ心構えができていた。

先の一文の意味が明らかになっても、なお違和感が残る。ここフランスあるいはアメリカでは、問題となっっているのが、ハンガリーでもなければ、ヨーロッパでもなく、政治体制の事柄にすぎないと考えられていたからだ。ハンガリーが脅威に晒されていると言う者はおそらくいないだろうし、それにもまして、死に直面したハンガリー人がヨーロッパに呼びかける姿は理解されないだろう。ソルジェニーツィンが共産党の抑圧を告発するにあたり、ヨーロッパは死を賭けても守るべき基本的な価値であると訴えることなどあるだろうか？

それは決してない、「自国のために、そしてヨーロッパのために死ぬ」ことは、モスクワやレニングラード〔訳注 現・サンクトペテルブルク〕では想定できない。それができうるのは、ブダペストあるいはワルシャワなのである。

では、ハンガリー人、チェコ人、そしてポーランド人にとって、ヨーロッパとは何か？ これらの民族はその揺籃期ようれんからローマ教会に基盤を置くヨーロッパの一部だった。その歴史のあらゆる段階にこれらの民族は関与していた。かれらにしてみれば、「ヨーロッパ」という語は地理的な現象ではなく、「西欧」と同義の精神的概念である。ハンガリーがもはやヨーロッパでなくなってしまうと、つまり、西欧でなくなってしまうと、自分自身の運命や固有の歴史から切り離されてしまう。そればかりか、自己のアイデンティティの本質をも喪失してしまうのだ。

地理上のヨーロッパ（大西洋からウラル山脈にいたる）はつねに二分され、それぞれ独自に発展を遂げてきた。一方は古代ローマとカトリック教会に結びつき（ラテン文字がその特徴である）、もう一方はビザンツと正教に基盤を置いている（キリル文

字がその特徴である)。一九四五年以降、二つのヨーロッパを分かつ境界線は数百キロほど西へ移動し、自分たちは西欧だと思っていたいくつかの民族は、ある朝目覚めると、自分が東側にいることに気づいたのだった。

その結果、戦後のヨーロッパに三つの基本的な状況が生まれた。西欧の状況、東欧の状況、そして地理的には中央に位置し、文化的には西側に、政治的には東側に位置する、最も複雑なヨーロッパの状況である。

中欧と私が呼ぶ、この矛盾を抱えた地域の状況を踏まえれば、過去三十五年にわたって、ヨーロッパの劇的な出来事がなぜここに集中しているか理解できるだろう。一九五六年、大規模なハンガリー蜂起、引き続いて起きた血まみれの殺戮^{さつりく}。一九六八年の「プラハの春」とチェコスロヴァキア占領。一九五六、一九六八、一九七〇年、そして近年のポーランドでの反乱。その劇的な内容ばかりか、歴史的な影響という点において、東西問わず、地理的なヨーロッパで起きていることのうち、このような一連の中欧での抵抗運動に比肩するものはない(原注3)。これらの抵抗運動のいずれ

もが、ほぼすべての民衆から支持されていた。ロシアが背後にいなければ、それぞれの国の体制は三時間ともたなかつただろう。つまり、プラハやワルシャワで起きた出来事は、その本質において、東欧、ソ連圏、共産主義の悲劇ではなく、中欧の悲劇として捉えるべきなのである。

実際のところ、ほぼすべての国民に支持されたこれらの抵抗運動はロシアでは考えられないものである。共産圏の最も安定した国として知られるブルガリアにおいても、そのようなことは考えられない。なぜか？ブルガリアはその起源から東側文明の一部であり、また正教会の初めての宣教師の幾人かはブルガリア人だったからである。先の戦争の結果、ブルガリア人が体験した政治変化はきわめて大きく、不本意なものであったが（ブダペスト同様、この地の人権も侵害されている）、チェコ人、ポーランド人、ハンガリー人が感じるような文明上の衝撃はない。

(3) これらの抵抗運動に、一九五三年のベルリンで起きた労働者の蜂起を加えることはできるだろうか？ できるかもしれないし、できないかもしれない。東ドイツの運命は特殊な性格を帯びている。二つのポーランドは存在しえない。それに対し、東ドイツはドイツの一部であり、民族としての存在は脅かされてはいない。その一部はロシアの手中で人質となつているため、西ドイツとソ連はきわめて特殊な政策を取っている。だが中欧では適用されていないため、いつの日か、西ドイツとソ連の犠牲になるように私には思えてしかたがない。そのことが、東ドイツと他国のあいだで自然な共感が生まれぬ理由となつている。ワルシャワ条約機構の五カ国の軍隊がチェコスロヴァキアを占領した際、それは明らかだった。ロシア人、ブルガリア人、東ドイツ人は強硬で恐れられていた。それに対して、ポーランド人とハンガリー人は占領に賛同せず、あからさまにサポータージユを繰り広げるためにありとあらゆることを行なつていて、私はそのような挿話をいくつも語ることができる。ポーランド・ハンガリー・チェコの共謀関係、それに、熱狂的な支援を見せたオーストリア、反ソヴィエト的な怒りの嵐が国中を席捲したユーゴスラヴィアを付け加えれば、チェコスロヴァキアの占領は、中欧という伝統的な空間を突如として、かつ驚くほど明確に出現させたと言えるだろう。

民衆や文明のアイデンティティは一般に「文化」と呼ばれる精神的な創造行為の全体に反映され、縮約される。仮にこのアイデンティティが致命的な脅威に晒されるのであれば、文化の生氣はむしろ強度と激しさを増し、文化は人々が集う生命力を帯びた価値となる。そのため中欧での抵抗運動はいずれも、同時代人による創作とならび、文化的記憶が、他の場所では見られないような、かつヨーロッパの民衆による抵抗運動では見られないほど重要で決定的な役割を担ったのである（原注4）。

ロマン主義の詩人ペターフィの^{*36}名前を冠するサークルに集った作家たちはハンガリーでの大規模な批判的な考察を始め、かれらが一九五六年の動乱の導火線を準備した。「プラハの春」に見られる自由を強く求める解放を目指し、何年も準備を進めてきたのが、演劇、映画、文学、そして哲学だった。一九六八年、かの有名なポーランドの

学生たちの蜂起の引き金となったのは、ポーランド最大のロマン主義詩人ミツキエーヴィチ^{*37}の戯曲の上演が禁止されたことだった。文化と生活、創作と民衆の幸せな結びつきは、ほかの場所では真似^{まね}できない美しさを中欧の抵抗運動に刻み、その時代を体験した私たちはその美しさに今なお魅了され続けている。

ドイツやフランスの知識人は、言葉の最も深遠な意味において、私が美しいと見なすものを胡散臭^{うさんくさい}いものと捉えるようだ。このような抵抗運動が文化の大きな影響を受けていると、かれらはそれが本物ではなく、真に民衆的なものではないと考えるらしい。奇妙に思えるが、幾人かの人々にとって、文化と民衆は混ざり合うことのない二つの別の概念なのである。かれらの目に映る文化の概念は、特権化したエリートイメージと重なっている。それゆえ、かれらは「連帯」の運動を、それ以前の抵抗運動よりもはるかに好意的に受け止めたのである。だが、誰が何と言おうと、「連帯」の運動はその本質においてそれ以前の運動とは異なってはならず、むしろ、それらの運動の頂点に位置するにすぎない。ある国の民衆と、迫害され、無視され、虐げられた

文化的伝統の（完璧に組織された）完璧な結合なのである。

【原注】

(4) 外から眺めている者に見れば、理解しがたい逆説がある。一九四五年以降の時代は、中欧にとつて最も悲劇的な時代であると同時にその文化史における最も重要な時代であった。亡命してしようと（ゴンブローヴィチ^{*38}、ミウォシユ^{*39}）、非合法の創作であろうと（一九六八年以降のチェコスロヴァキア）、あるいは、民衆の圧力に屈した当局によつて許容された活動であろうと、この時代に生まれた映画、小説、演劇、哲学は、ヨーロッパが生み出した作品の頂点をなしている。